



陳情 4 第 12 号

つくばセンタービル 40 周年に向け室内意匠の保持と広場の活性化に関する要望書

つくば市議会議長 小久保 貴史 様

2022 年 8 月 25 日

つくばセンター研究会

代表 冠木 新市

連絡先 つくば市

電話

はじめに

私たち「つくばセンター研究会」は、つくば市 HP で「つくばセンタービル・リニューアルの方向性（案）」が公表（2020 年 6 月）された翌年 3 月から活動を開始し、頻回に行った勉強会の後に、リニューアル計画の変更を求めて、つくば市長ならびに市議会議長に「つくばセンタービルのエスカレーター設置計画等の見直しを求める要望書」を、2021 年 6 月 1 日に提出いたしました（第 1 弾）。

さらに、要望書での議論を公開の場で客観的に検証するため、2021 年 6 月 27 日にシンポジウム「緊急討論 つくばセンター広場にエスカレーターは必要か」を開催いたしました（於：つくばイノベーションセンター大会議室）。そこで検証された客観的な議論に基づき、2021 年 9 月 3 日に再び「つくばセンタービル・リニューアル計画の再検討を求める要望書」を提出いたしました（第 2 弾）。

そして 2021 年末には、つくば市によってリニューアル計画の抜本的な見直しが表明され、磯崎新氏設計の建築意匠を尊重し、保持することが表明され、中央広場エスカレーターの新設や建築の外観の改修が撤回され、改修範囲は室内に限定されることとなりました。「つくばセンター研究会」が提出した「要望書」（第 2 弾）での要望がすべて盛り込まれる計画の見直しでした。つくばセンタービルのオリジナルの意匠を文化的価値としてつくば市が再確認した英断として、その決断を私たちは高く評価しています。

つくば市によるリニューアル計画の見直しは、2020 年 6 月につくば市 HP で公開された「つくばセンタービル・リニューアルの方向性（案）」で表明されていたリニューアルの理念、つまり「プリツカー賞を受賞した磯崎新氏が設計した現在の建築デザインを活かしたリニューアル」（16 頁）という考えに立ち返ることであると理解しています。その後今日に至るまで「つくばセンター研究会」は、実施される改修に大きな関心と期待を持ってその推移を見守って参りました。

そして現在、旧アイアイモールの一部の改修が実施され、さらにはつくば市による室内の改修計画についても全容が明らかになりました。私たちは、建築設計の専門家のアドバイスも得て、すでに実施された改修部分とこれから着工されようとしている計画に関して、様々な疑問を抱かざるを得ず、この要

望書を再々度（第3弾）、つくば市長ならびに市議会議長に提出し、以下の5点の具体的な改修計画の変更を強く要望するところであります。

## 室内改修の問題点と変更の提案

### 1. センター広場の「活性化」提案に立ち返ること：広場への搬入・搬出ルート確保

リニューアル計画の目的は、この施設の「活性化」にあったはずである。最初にリニューアル計画が公表された、2020年6月のつくば市HPでの「つくばセンタービル・リニューアルの方向性（案）」では、市民活動拠点の整備と併せて、センター広場の利用の活性化が謳われている。

エスカレーター新設は撤回しても、中央広場の活性化という目標は今も変更ないはずである。2020年のつくば市のHPには、当初から「イベントなどの市民活動がしやすくなるセンター広場」（「方向性（案）」17頁）が謳われている。中央広場での様々なイベントの開催を想定すれば、広場への機材や装置の搬入・搬出は不可欠である。旧アイアイモールでは、その十分な廊下幅が搬入・搬出を容易にしていた。

それに対して、現在進められている改修計画は、中央広場への機材の搬入・搬出ルートが考慮された痕跡は微塵も見られない。つまり、つくば市が当初から表明していた「イベントなどの市民活動がしやすくなるセンター広場」への改修が意図された計画でないことは、明らかである。「イベントなどの市民活動がしやすくなるセンター広場」への利用を、むしろ阻害する計画案であると言わざるを得ない。

道路レベル（1階レベル）での機材の搬入・搬出が困難となった場合、ペDESTリアン・レベル（2階レベル）からの搬入・搬出が不可避になり、それには様々な制約と危険性が生じ、自ずから広場でのイベントの可能性が制約されることとなる。結果的に、センター広場でのイベント実現の可能性がさらに狭められることは間違いない。

センター広場への機材の搬入・搬出ルートを実現するには、1階西エントランスから広場へのルートを確認するのが、唯一の可能性である。そのためには、改修計画にある事務室と印刷作業室の一部の壁面位置の変更が必要となるが、それは微細な変更のレベルで収まる問題である。この搬入・搬出ルートの確保こそが、最も現実的であり、「イベントなどの市民活動がしやすくなるセンター広場」には不可欠な変更である。その場合には、このルートの床補強と適切な床仕上げが必要となる。

とにかく、広場への搬入・搬出ルートの確保は、広場の「活性化」には不可欠な要件である。

### 2. つくばセンター広場の「利用」の制約をなくす：広場東側の出入り口の開放を求める

改修を実施した「つくばまちなかデザイン」は、独自の判断で中央広場東側の出入り口を閉鎖している。この一民間企業の判断は、つくばセンター中央広場の公共空間の利用形態を根底から覆してしまった。つくば市が本来求めていた中央広場の活性化に対し、「まちなかデザイン」が実施したリニューアルは、完全に逆行している。

つくばセンタービル竣工以来、今日に至るまで、この広場東側出入口（添付資料 1 では D の出入口）は、中央広場にとって最も利用頻度が高く、重要な出入口であった。筑波大学芸術学系鶴沢研究室はこの広場の人流調査（2008 年）を行い、1 階レベルで広場に入出入りする人々の約 68%がこの東側出入口を利用していることを報告している（2009 年日本建築学会で発表）。[資料 1・2 参照]

また、「つくばセンター研究会」が 2021 年に行った人流調査でも、広場に 1 階から進入した人々の約 58%が、この東側出入口の利用であったことを確認している。[資料 3 参照]

こうした事実を完全に無視し、一民間企業の独断で東側出入口が閉鎖されたことで、中央広場を自由に利用する市民たちの権利は大きく損なわれたと言わざるを得ない。

つくば市の指導下にある「つくばまちなかデザイン」に対して、実施したリニューアルを速やかに修正し、中央広場東側出入口の開放並ならびに自由な通行を強く指導していただきたい。

### 3. メイン・エントランスは建築の「顔」であり、「玄関」である：「インナーモール B」の空間用途は何か？

土浦学園線に面する正面エントランスは、ノバホールへのエントランスであり、そのエントランス・ロビーへと続く。しかし改修計画図面では、その空間は新たに「インナーモール B」と名付けられ、その空間を多数の机や椅子が埋めている。その数、約 100 席である。明らかにエントランスの空間機能とは異なる用途が想定されているはずだが、その用途を具体的に明らかにしていただきたい。

つくば市の数少ない文化施設であるノバホールへの訪問者たちは、この空間の出現に間違いなく戸惑い、驚くはずである。メイン・エントランスとは建築の「顔」であり、「玄関」である。そこに並ぶ夥しい机や椅子は明らかに場違いであり、つくば市の品位が疑われると言わざるを得ない。

劇場/コンサート施設のエントランスロビーがどこでも空間的余裕を持って配置されているのには、機能的に重要な理由がある。そうした施設は、開演及び閉演時（特に閉演時）に利用者が集中的に出入口に殺到するので、人々の滞留を起こさないために、余裕のあるロビー空間は不可欠なのである。これは建築設計の初歩的な常識である。

この計画案のまま実施されれば、ノバホールの 1 階ロビーは二度と活用できなくなる。これらの机・椅子の配置計画は即刻撤回すべきである。想定される空間用途は、「図書コーナー＋フリースペース」を充実させれば十分対応可能である。

### 4. 空間密度の大幅な改変：つくば市の文化的なゆとりが失われようとしている

ここで言う空間密度とは、壁で仕切られた、いわゆる部屋数が大幅に増加され、狭小な部屋が密集する空間状態を指している。空間恐怖ともいえる多数の部屋の密集は、文化的なゆとりの欠如を端的に表していると言わざるを得ない。磯崎新氏のオリジナル空間には、文化的ゆとりの空間が存在していた。

例えば、仕切られたそれぞれの空間は、

現況では： エントランスロビー（図面ではインナーモール A・B・C と表記）＋ 風除室

小ホール

楽屋 1・2

事務管理コーナー

フリールーム

筑波大学情報科学センターAI ラボ

つくばまちなかデザイン

つくば市市民活動センター

その他に倉庫 5、男・女トイレ各 2 である。

改修後は： インナーモール A・B・C 机・椅子 80 席＋ その他にベンチ 18 席

音楽室

調理室

調理台 4 台

更衣室 1・2・3

印刷作業室

作業台 4 台

会議室

机・椅子 8 席

和室 1・2 + 和室踏込

22 畳

消費生活センター

机・椅子 6 席

相談室 1・2・3

机・椅子 10 席

事務室 A・B・C

机・椅子 22 席 + その他にカウンター 7 席

図書コーナー＋フリースペース

机・椅子 30 席 + その他にベンチ 16 席

講座室

机・椅子 32 席

キッズコーナー

おむつ替え・授乳エリア

その他に倉庫 11、男・女・多目的トイレ各 2 である。

少なく見積もっても、現況の約 2 倍の部屋数が詰め込まれている。明らかに空間の狭小化、密集化であり、公共空間に不可欠な空間的豊かさは微塵もない。

施設への様々なニーズがあることは想像に難くないが、そのことが、それぞれの要求を個別の空間として確保することではないはずである。そこには有効かつ豊かな空間利用を求めて、多目的な空間利用を想定した調整と空間配置が不可欠である。そうした空間配置の調整が不十分であったと言わざるを得ず、つくば市計画当局の調整能力を疑わざるを得ない。

仮に、改修計画通りに工事が実施された場合、同一時間帯での施設利用者は約 300 人以上も想定される。以前つくば市が公表した「1 日」の利用者予測は、最大でも 200 人ではなかったか。もし、つくば市にそうした新たな利用者予測があるのであれば、その具体的なデータを開示していただきたい。そうした利用予測データの前提なくしては、すべての公共施設計画の実施はあり得ない。このまま実施され

た場合、多数の部屋が利用者0といった日が続出しかねず、結果的に空間利用は非効率にならざるを得ない。その時には、過剰かつ無用な施設設計として、計画当事者の責任は免れ得ない。

また別な問題も存在する。同一時間帯での施設利用者が約300人以上といった現実が出現した場合、徒歩や電車利用による施設利用の可能性を考慮した上でも、車利用者のための駐車スペースを施設周辺に新たに確保することは不可能である。おそらくは、計画案から想定される約30人程度の市職員の駐車スペースを施設周辺に確保するだけで手一杯ではなかろうか。この事実だけでも、現在の改修計画がいかに現実離れした計画であるかを如実に物語っている。

#### 5. 中央広場西側の既存エレベーターの改修は不可欠である：視認性を高めるため

広場への当初のエスカレーター新設の計画意図には、高齢者への配慮が含まれていたはずである。そうした配慮が有意義なものであることは疑いない。ただし、エスカレーターを新設するまでもなく、すぐ近くには当初からエレベーターが設置されていた。問題は、その存在が視認しにくい形状であり、使用頻度が必ずしも高くはなかったことである。2021年に「つくばセンター研究会」が実施した中央広場の人流調査では、このエレベーター利用者（添付資料のG 出入口利用者）は僅か4%に満たないことが確認されている。[資料3参照]

その最大の理由は、エレベーターの存在の視認性が極めて低いことにある。ペDESTリアン・レベルでも、広場1階レベルでも、このエレベーターの存在が容易に視認できる改修が不可欠である。磯崎新氏の建築のオリジナリティを損なわずに改修することは、十分可能である。ペDESTリアン・レベルの建築的輪郭は変更せず、エレベーターを囲む不透明な外壁の一部を透明な壁に変更するだけである。市民への当然のSDGs対応として、その実施は不可欠であろう。

#### おわりに

つくば市のリニューアル計画の基本的なコンセプトが何処にあったかに立ち返り、改めて改修計画を真摯に再検討していただきたい。

当初の改修の目的は、つくばセンタービルとその中央広場の存在を研究学園都市の中で再認識させるための積極的な提案であったはずだ。残念ながら、現在の改修計画案にはそうしたコンセプトは全く窺い知れない。リニューアル計画には、オリジナルの建築に敬意を払いつつ、新たな広場の「活性化」を実現し得る提案が求められているはずである。

そうした点では、上記で指摘した改修計画の問題点について、少なくとも再検討を求めたい。それがなければ、つくば市が歴史的汚点を残すことは間違いない。改めてその責任の所在を私たちは継続して問い詰めていきたい。

現在の改修計画を真摯に見直し、慎重に実践することで、来年迎えるつくばセンタービル40周年を、多数の市民たちとともに心置きなくお祝いし、この建築の空間価値を後世に継承していきたいと切に願う。

以上